

座談会

第2弾 再生医療の産業化に対して必要な仕組みとは — 2011年から10年間で何がどう変わったのか —

出席者 (五十音順・敬称略)

司会

畠 賢一郎 株式会社ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング
代表取締役 会長執行役員 / FIRM代表理事(会長)

再生医療等製品提供企業

鮫島 正 テルモ株式会社 理事
鈴木 龍夫 JCR ファーマ株式会社 理事
廣瀬 徹 ノバルティスファーマ株式会社 取締役
グローバル医薬品開発本部長

アカデミア

西田 幸二 大阪大学大学院医学系研究科
脳神経感覚器外科学(眼科学) 教授
佐藤 正人 東海大学医学部医学科外科学系整形外科学 教授
東海大学大学院医学系研究科運動器先端医療研究センター センター長

オブザーバー

田畑 泰彦 京都大学ウイルス・再生医科学研究所生体材料学分野 教授 / 本誌編集委員長

*本座談会は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大の時期に収録したものです。出席者の半数はWebでの参加となりました。

【畠】 皆さん、本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

本誌では、2011年に同様のテーマで座談会を開きました。そのときにいくつかの論点が出ております。本日は、2011年からの10年間、再生医療がどう進んできたのかということと10年前にさかのぼって、当時考えていたことと、現在と同じなのか、違うのか、同じことで悩んでいるのか、違うことで悩んでいるのか、はたまた将来を示唆する何かブレークスルーのポイントはありますかというところを、先生方にお話しただければありがたいと思っております。どうぞよろしく願います。

アカデミアの立場から見た10年間の変化

【畠】 それでは、はじめに佐藤先生にご質問させていただきます。佐藤先生、10年前と比べて、現在、再生医療が大きく進んだもの、もしくは相変わ

らず同じことで悩んでいるなどという印象、その変化点等、何かコメントをいただけますでしょうか。

【佐藤】 ありがとうございます。ちょうど10年前に私どものところでは、再生医療等安全性確保法が施行される前のことですが、ヒト幹細胞臨床研究でやっと厚労大臣の意見書が出て、2011年12月から第1例目の自己細胞シートによる関節軟骨の再生医療を始めたところでした。2019年先進医療Bとして承認されて、2020年ようやく実施できるまで来ました。ここまで来るのに10年かかったかなあという思いで、10年間と言われると、そういう感じです。

私どもは弱小の一私学なので、いきなり医師主導試験というわけにはいかず、臨床研究から少しずつ進めているところですが、法律改正もあって、途中、臨床研究を中止せざるを得なかったり、いろいろなことがありました。だけど、本当に少しずつ前進した10年であったという思いがあります。